

校長室だより～和光高校OB列伝 第8号 H29.7.7

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 達

格地 現 さん (9期生)

氷上の格闘技 アイスクッカーに人生を捧げたOBがいる。埼玉栄高校体育教師そしてアイスホッケー部監督、さらに埼玉県アイスホッケー連盟理事長として活躍している格地現（あきら）さんだ。今年53歳になる格地さんには2つの夢がある。0からのスタートから育て上げたサムライビーズ(埼玉栄アイスホッケー部の愛称)を率いて全国のトップを狙うだけにとどまらない壮大な目標である。



母校和光高校校長室にて

和光高校創立の年1972年は札幌冬季オリンピックの年であり、笠谷選手などの活躍に湧いた純ジャンプの影に隠れていたとはいえ、日本アイスホッケーナショナルチームは、ソ連やチェコスロバキアなどの強豪に果敢に挑み、その迫力とスピードに多くのファンが驚くと同時に国内での認知度が急激に高まった。しかしながら当時はまだ「観る」だけのスポーツであった。その理由は言うまでもなく「リンク」の有無である。伝統的に苫小牧や釧路など北海道が圧倒的に盛んであり、しいて言えば青森（八戸）や栃木（日光）など限られた地域でしかアイスホッケーは存在しなかったのだ。次第に国土計画や西武鉄道など東京のチームが台頭し普及活動が盛んになり「する」スポーツへの道が開かれた。こうした時期に小学生だった格地さんは、大学のアイスホッケー部監督をされていた父上の影響もありアイスホッケーに打ち込むこととなる。



埼玉栄アイスホッケー部の練習風景。出身地は北海道、青森、神奈川など。全員が寮生活を送っている。ほぼ全員が大学進学を希望しており、早稲田：慶応・明治・法政・立教・立命館・同志社など錚々たる名前が並ぶ。トップチームに進む者も多数いる。氷上以外はどのようにウェイトトレーニングが中心だがレスリングなどから体の使い方も学んでいる

重い防具とスティックを抱え、成増から品川まで通う日々が始まる。競技者として重要な「サイズ」には恵まれなかったが、ウェイトトレーニングの成果と強靱な精神力により、格地さんは東京代表の中心選手となり和光高校在学時に国体少年の部に出場する。同期のラグビー部並木孝喜の学校での国体選抜壮行会を横目で見ながらいつかは自分もみんなから期待され祝福されるよう一層頑張るといふ決意をする。その悔しさこそ数々の栄光を埼玉にもたらす原点であったのだ。

指導者の道を迷わず選んだ格地さんは東海大学に進学し体育教師を目指す。埼玉栄高校で教員生活のスタートを切った（昭和62年（1987年））。平成2年（1989年）にようやくアイスホッケー部創部、最初のチームは自分のクラスの生徒をかき集めた全員が素人のチーム。ホッケーはおろか氷に乗るのも初めての者がほとんど。苦勞してかき集め



た防具も全員に行き渡らず交替で肘や肩のプロテクターを付けていた。こうして予算も実績も経験も練習場所もすべて無い中で埼玉栄アイスホッケー部がスタートしたのだ。ところがこの素人軍団が2年後の冬に最初の奇蹟を起こす。なんと関東予選を突破し国体の本大会出場権を勝ち取ったのだ。深夜神奈川や群馬のリンクを借り猛練習に明け、大東文化大や東海大などの強豪チームに胸を借りまくった苦勞が無欲

長距離の移動を前提に栄高校でも一際大きく豪華な5代（台）目バス。スクールカラーのオレンジの車体にチームのロゴが鮮やか

の選手たちの心に火を点けたのだ。学校内でもこうした努力が認められ、いよいよ強化にも力が入る。格地さんの教えに共感する選手が次第に集まるようになってきた。格地さんは免許を取り大型バスでより強い相手を求め奔走する毎日。オフシーズンには北海道をはじめ全国に足を運び志ある選手に声をかける。この執念で埼玉の新興チームがなんとか形になりインターハイや国体の上位常連となった。しかしながら北海道の壁は想像をはるかに超える高さであった。

転機は妻である寿美恵さんが寮母になってから訪れる。ちなみに寿美恵さんも和光高校9期生、正に内助の功である。北海道を中心に各地から入学してきた部員の面倒を一手に引き受ける。掃除や洗濯そして身体づくりのための食事には最も気を遣う。何よりも厳し

い監督の下故郷を離れ頑張る高校生に365日休むことなく母親代わりとして分け隔てなく接してきたのである。さらにこの間自身の二人の子供たちも文武両道のアスリートとして立派に育て上げた。このような努力の積み重ねが続き、二度目の奇跡が2003年に訪れる。埼玉栄単独チームである埼玉選抜が北海道の連覇を止め国体で優勝し日本一を勝ち取ったのだ。格地さんの高校時代からの夢がまさに現実となったのである。



寮の玄関でツーショット、正に夫唱婦随 最近朝ご飯は格地さんが作っているそう

しかしながら夢はこれだけでは終わらない。まずは埼玉栄高校運動部顧問の中核として学校全体の益々の隆盛を図っている。切磋琢磨しお互いが高め合えるような関係の構築を模索している。若手指導者に適切なアドバイスを与え、それ以上に自らの後ろ姿で高校チームの理想像を示している。実績のみならず面倒見の良さから周囲の信頼は絶大である。

そして本業のアイスホッケーでは、かつての強い日本代表を取り戻すプランを温めている。埼玉栄アイスホッケー部(=サムライビーズ)が30年かけて培った二大強国(カナダとロシア)の戦術の融合、である。それは日本代表のみならずNHL(北米のプロリーグ;世界最高峰のリーグ)に挑戦する教え子を育ててきた格地さんにとっての矜持である。そしてアイスホッケーの文化を日本に築くことこそライフワークなのだ。自らも日々トレーニングを怠らず、さらなる栄光を掴み取るまで格地さんの挑戦はまだまだ続いているのだ。



ほんの一部の盾と主力選手たち

